である．ステロイド療法が奏功したとの報告も見られるようになったが，本邦報告123例を分析した後藤によると，癌の合併が予後を左右する因子であろうと言及している．

30）腹部臓器に石灰化を伴ったサルコイドーシスの1例

鈴木　健司・荒木　　進（燕労災病院内科）
榎本　　悟
渡辺　俊明（新潟大学第三内科）

症例は59歳の女性，昭和63年5月頃より出現した霧視を主訴に当院眼科を受診，眼科的にサルコイドーシスの診断を受けた．胸腹部X線写真にて，両側肺門リンパ節腫脹と脾臓を主とした上腹部の石灰化を認め，この精査のために10月14日当科へ入院した．26歳時に詳細不明ながら熱性疾患の既往がある．入院時現症では特記すべき所見はなく，検査成績では，ツ反11×10mm，抗核抗体20倍（Speckled pattern），リゾチーム・アンギオテンシン変換酵素の軽度上昇のみ陽性．肝生検でサルコイド結節を証明し，診断を確定した．石灰化の原因は，サルコイド結節の類上皮細胞が産生するビタミンDにより，サルコイド結節自らが石灰化する可能性も考えられた．

31）胃癌に合併した腹膜偽粘液腫の1例

三上　恒正・斎藤　征史
星　　一・後藤　俊夫
加藤　俊幸・丹羽　正之（県立がんセンター新潟病院　内科）
小越　和栄
島田　寛治（　同　外科）
鈴木　正武（　同　病理）

粘液産生細胞が腹膜や大網に着床し，腹腔内にゼリー状の粘液性腹水が貯留する腹膜偽粘液腫は比較的稀な疾患である．その原発巣は良性と悪性を含め卵巣や虫垂が約72%を占め，胃癌によるものは極めてめずらしい．私共は胸部レ線の異常で来院し，精査の結果IIc型胃癌由来と考えられる腹膜偽粘液腫の1例を経験したので報告する．症例：50才，男性．現病歴：昭和62年末より食欲不振と体重減少を認めるも放置．昭和63年2月胸部レ線で右胸水を指摘され来院．胃内視鏡検査で胃前庭部のIIc型分化型腺癌，腹部CTで腹水よりhigh densityな結節状で肝波状彎入像を示す貯留物がみられ，胃癌に合併した腹膜偽粘液腫と診断した．切除不能であったが約1年後の現在生存中である．

第50回新潟消化器病研究会

日　時　　平成元年7月29日（土）
　　午後1時30分より
会　場　　新潟東映ホテル

一　般　演　題

1）小児胆嚢捻転症の1例

斉藤　文良・白崎　　功
阿部　要一（木戸病院外科）
小川　　淳・五味　崇行（　同　小児科）

胆嚢捻転症は1898年 Wendel により，はじめて報告され，本邦では1932年，横山らにより第1例が報告されて以来，これまで180余例を数える比較的稀な疾患である．小児の発症は極めて稀で，16例報告されているにすぎない．

最近我々は，小児の胆嚢捻転症を経験したので報告する．

患者は3歳8カ月の女児で，急性虫垂炎による穿孔性腹膜炎の診断で緊急手術を行なったところ，胆嚢捻転症であったため，胆嚢の捻転を整復し胆嚢摘出術を施行した．胆嚢はGross II型の遊走胆嚢で，時計方向に180°の捻転を認めた．摘出により手術後経過は良好であった．

2）胆道癌における放射線療法の検討

真船　善朗・本間　　明（済生会病院内科）
尾崎　俊彦・宮川　　隆
相場　哲朗・川口　正樹（　同　外科）

過去3年間に当院で経験した胆道癌15例のうち PTCD の内瘻化とコバルト療法を施行した4例について検討した．

4例の内訳は，胆嚢癌が2例，胆管癌が2例で何れも進行癌であった．PTCD の内瘻化後，コバルトは1回2Gy，合計 50Gy を病変部に照射した．その結果，4例中3例は，減黄がみられ，そのうち2例は，1年以上の比較的長期生存を得ることができた．しかし，減黄が不十分であった例は，3カ月で死亡した．

結果として，PTCD の内瘻化と放射線療法は胆道癌の原発巣に対しては，有効と考えられた．しかし，遠隔転移に対しては，無効であり，化学療法や免疫療法を含めた集学的治療が必要である．